

『舊聞日本橋』

岡本綺堂

「舊聞日本橋」はこのごろ私が讀んだ面白く且有益な新著の一つである。著者の長谷川時雨さんは私よりも若いこと勿論であるが、兎も角も私と相前後して明治の初期に生れ、しかも其當時は亡びゆく江戸人の生活が比較的充分に取込まれてゐる日本橋區内に生長した人である。その時雨さんが自己の周囲を中心にして、過去の日本橋を記してゐるのがこの「日本橋」で、題して「舊聞」といふが、私には「新聞」がなかく多い。

私は山の手に育つたので、下の町のことにはよく知らない。時雨さんよりも年長者でありながらこの著によつて明治初期における日本橋の町々の姿、日本橋の人々の生活、等、等、色々の新しい事を教へられたのである。まして現代の若い人々に取つては、殆ど思ひも及ばないほどの新しい話、珍しい話であるに相違ない。

この著には長短甘穢の話が收められてゐるが、そのうちには物語風のものもあれば、隨筆風のものもある。物語風のものでは「木魚の願」や「朝敵大夫の末説」や「チンコツキリ」などがもつともわたしの興味をひいた。舊幕臣の敗戦者の一生を描いて、その人物の誰彼が文字通りに「面目知らぬ」たるものがある。私の周囲にも昔はこんな人物が澤山に動いてゐたので、時雨さんに乗に上せられた復讐は、みな作り物の嘘でないことが明かに認められるのである。

これは日本橋に縁のない話ではあるが「チンコツキリ」の中に、著者が根岸に假寓してゐる當時の生活や、土地の風景を細致してある。私の家にも根岸に二三の知人があつて、少年時代から屢々その土地に踏み込んだ経験があるので、その當時の思ひ出がまさしくと浮んで來た。樋口一葉女史の「たけくらべ」に龍泉寺町附近を描寫してあると異曲同工、一種の詩趣を帯びた寫實風の筆致によつて、周囲

の情景が美しく現されてゐる。その根岸も今はまつたく變つた。かくの如く精細に書き残されなければ、昔の根岸のおもかげは永久に忘れられて仕舞うであらう。私なども半分ぐらゐは忘れてゐた。

これと同様の記事が「流れた唾」の中にも見出される。それは夏の夜の日本橋區を描いたもので、涼み台にあつまる人々、そこへ流しの新内が來る、義太夫が來る、櫻湯の店が出る。その描寫は頗る精細で、金華糖の招き猫をかじる、と、ガランドウとムクがあつたな

これが自動車といふもの



これが自動車といふもの

車妹姉のユシツナ

自動車株式會社

ど、私もしばしば驚歎したことである。現在こゝらに住んでゐる人達でも、この情景を知らない者が多いであらう。

そのほか一々こゝに紹介することは出來ないが、以上いづれも著者の少女時代の見聞が大部分を占めてゐる。婦人の觀察力が特に鋭敏なためでもあらうが、私は時雨さんの記憶力のすぐれてゐるのに舌をまかざるを得ない。單に日本橋に限つたことではないが、下町の姿は電車の開通以後に變り、更に先年の震災以後に著るしく變つた。それに連れて、住む人々の生活も變つた。

黒い大きい靴が朱肉になると商ひの工合が違つて來る——と、著者のお父さんがいつたさうである。實際、商家の印刷が黒から朱に變つただけでも、商かひの仕方に變遷がある。それが紫のゴム

取に變つた現代人には、過去の世相や人情は想像し得られない。それを親切に忠實に教へてくれるのは、この「舊聞日本橋」である。明治時代を研究する人々に取つては、貴重なる文獻の一種といつてよい。

著者は更に續編を書くの意圖があるやうに聞かしてゐる。私はその發表の早からんことを望むものである。(菊判三二〇頁、二圓三十錢、神田岡倉書房)